

【意見交換】テーマ「発達の特徴を持つ子ども・若者の社会的自立を支援する」 ～ ライフステージに応じた切れ目ない相談支援の実現に向けて ～

- 進行役：NPO法人リンケージ理事長 石川京子氏（前列左端）
- 助言者：みどりクリニック院長 鈴木基司氏（同2人目）
県障害政策課主任 岡直矢氏（同3人目）
- 報告：「玉村町における健康福祉分野と学校教育との連携」
玉村町健康福祉課 畑中哲哉氏（前列右端）ほか5名（後列）



- 登壇者（左写真：左端から順に）
前橋市子育て支援課こども健診係 望月恵氏
児童発達支援センター「つくし園」 秋松宗雄氏
特別支援教育専門アドバイザー 武井絵里子氏
県中央児童相談所発達支援係 吉田喜美子氏

<健康福祉と学校教育との連携>

石川 玉村町から健康福祉分野と学校教育との連携について報告していただきます。

畑中 子どもたちの支援に取り組むことは、就学前からも、義務教育後も続きます。何らかの「生きづらさ」がある場合は特に、継続的な支援・伴走型の支援が求められています。

福祉相談の窓口で大人のひきこもり問題などの相談を受ける中、やはり発達障害に起因する「生きづらさ」のある方が多いように感じます。大人になるまでにスルーされてきて、若年期に適切な支援に繋がっていなかったのかなという場合が多いと思います。

そこで、行政の目の届く、幼少期、義務教育から、発達障害の支援をつなげていけないかなという話から、既存の【にじいろファイル】の活用を見直し、切れ目ない支援の活性化に向けて、部局の垣根は取り払って関係者で協議を始めたところです。

町保健師 これは相談支援ファイルで、発達特性を持つお子さんやその家族へのよりよい支援を目指して作成され、各ライフステージの情報をつなぐツールとして、切れ目なく、一貫性のある継続的な支援を利用できることを期待しています。

支援の経過や生育歴、プロフィールなどを一冊にまとめてあり、基本的に保護者が記入、保管していただきます。また支援者が相談の記録などを書き入れたり、記入に困っている方には一緒に作成したりしています。保健センターや通級指導教室の幼児部で配ることが多いのですが、小学校や中学校でも配っています。

畑中 このファイルにきちんと記録を書き入れて、幼・保育園から小・中学校につながっていけば、お母さんはステージが変わるたびに同じことを説明する必要がないのですが、実際には使い切れていないのが現状で、改めてこれを活用していこうと話合っています。

実際、義務教育が終わると「不登校」とは呼ばれず、やがて「ひきこもり」となって社会福祉係につながってきます。保健センターでは健診で記録していた子どもが学校のステージになると情報が入って来なくなります。子育て育成課で一生懸命書き入れても、その後の親御さんへの支援が継続して行われないと単なる資料になってしまいます。学校現場でも先生が親御さんとの良好の関係を考えると発達障害になかなか踏み込めないでいます。

まずは、既存の「にじいろファイル」を活用して、保健福祉部局と学校教育の連携、コミュニティソーシャルワーカーとスクールソーシャルワーカーとの連携を目指していくことで、切れ目ない支援が、もっと良く、上手に、できたらいいなと思っています。

石川 玉村町の取組を聞いていただいて、関係機関が連携するにあたって、どんな情報を共有していったらいいのか、それぞれの立場からお話してください。

望月 部局が違っていると持っている情報もそれぞれ違います。保護者によっては、この人には話すけど、あの人には話さないことがあります。

今後のお子さんの成長を支援していく為に、他の支援者とどこまで情報を共有していいか教えていただけますかと、了解を取ることも多いです。

秋松 子どもにとっては幼稚園、保育園は最初に参加する広い社会になります。家でお母さんと一対一で過ごしているときは良好な反応を示しているのかもしれませんが、登園すると求められること、要求されることが本人のキャパを超えてしまうと、適応、対応できずにちょっとずれた行動に出てくるのかなと思います。

そういった情報がかなり大事なのだと思います。それが保護者に上手く伝わらないと、子どもが正しい行動ができないと思って、極端な話、手が出てしまうということになるかもしれません。子どもにとっては「じゃあ嫌だ、行かないよ」といことになってしまうかもしれません。

保護者から申告される情報も大事ですが、幼・保育園、子ども園に行く子どもが圧倒的に多くなっている中で、そこでの情報をどこまで拾っていくか、健診の方へ情報が反映されている市町村もありますが、そういったことが大事かなと思います。

武井 「にじいろファイル」は保護者が管理するようですが、どんな情報を載せていますか。

町保健師 そうですね。基本は保護者が作成していくんですけど、支援者にこういうところを出した方がいいんじゃないとか、発達系の子は就学に向けた情報を一枚書かせていただいて、担任の先生が決まったら渡してくださいと送り出しています。

ですからマル秘情報は書き入れられない状況になっています。

武井 例えば小学校から登校渋りの相談があった場合、先生との話の中で、幼・保育園ではどうだったのだろうか、という話題も出ます。就学前からあったとすれば本人の特性が関係しているのかもしれませんが、入学後であれば学習面での困難さなども一因なのかもしれません。また、ある小学校の先生は入学時、保護者からこんな相談を受けたそうです。それは「うちの子は一斉指示が通りにくいので、クラス全体に話したあと、個別に再度伝えてほしい。」という内容でした。それを受けて、その先生はそのお子さんの座席を前にし、わかりやすく伝える方法を考えることができたと言います。保護者と学校が連携したことで、お子さんのわかりやすさにつながったようです。

吉田 情報の共有という点では、立場上、アセスメントをすることが多いので、母子手帳とかいろいろお母さんに見せていただくのですが、子どもの頃のちょっとしたエピソード、迷子になって大変だったとか、最初の言葉が「アンパンマン」だったとか、そうした具体的なエピソードが書かれている母子手帳であったり、情報ファイル的なものがあると、子どもさんの育ちを把握するのに役立ったりします。

また、他機関からつながれてくる場合、親御さんがどこまでお子さんの特性を理解されているのか、それに対してどう受容的であるのかとか、なかなか難しい気持ちなのかとか、そういうところも繋げていただけると、すごくお話をする時に助かるなと思います。

相談の場で実際、にじいろファイルを持って来られた親御さんに会ったことがあります。お母さんからファイルを見せていただいた時、乳幼児期から、多分保健センターでこれ挟んでおいたらいいと言われたものが全部挟まれていて、学校の支援計画、過去に児童相談所で検査を受けた時の記録、全部そこに綴られていたので、相談が進めやすくなったことを覚えています。

岡 仕事上、全県で「個別支援ファイル」をどのくらい使っているのか年1回調査しています。35市町村で12カ所あって、うまく使えているのか、いないのかも話を聞いていますが、上手く使えていない市町村では、ファイルが埋もれてしまっています。

埋もれていると支援者側は諦めてしまったり意味がないのかなと思ってしまったりするところを、玉村町ではやっぱり大事だなと思って改めて取り上げていただいたのはすごいなと思いました。

大事だなと思ったのは、さっき代わりに書いてあげるぐらいのことを話されていましたが、保護者が書けないからツールとして使えないのではないかなと思っている所が多いんです。上手く使っている所は、実際、上手く書けないものだと思っているのが多かったです。

ですから、親が書くのだから我々は書けないと思うのではなくて、親御さんの隣に行って、一緒に書こうってみたいな感じで本当に書いている所もありました。

あと、マル秘情報をどこまで書くか問題もあると思いますが、学校の通知表で先生が書く意見欄がありますよね、そこにお子さんのいい所も書きつつ、ちょっとでもこういうところは苦手だよ、みたいなこともさらっと書くのがポイントだと先生から聞いたことがあります。

町教委 先生の思いとして「こうなって欲しい、こんな風に成長して欲しい」と書ける時には書くことが多いです。

岡 相談を受ける時に通知表を見て、先生が書いてある言葉の背景を読み取れるような表現に接することがありました。ストレートに発達特性の問題を書くのではなく、こういういいところもあるが、上手くいかないこともありますとか、表現を工夫してマル秘の情報を伝えたらいいと思います。

鈴木 医療的に見た時の難しさで話しますと、知的能力も含め社会に適応するために必要な力の苦手さが重い場合は周囲の方々が共通認識を持って連携し易いという面があります。親御さんも困っているし、園の先生も困っているので「どうしようか」という話が成り立ち易いかな、と思います。

やはり個々の困難さが軽度の場合、あるいは得意不得意のギャップがある場合等は難しいですね。何でもない、やがて何とかなるとも思える、難しい話はあまり聞きたくない気持ちもあるかもしれません。その子の特性(個性)を認めながら育てていく姿勢や場を作るための連携が必要なのですが、伝統的には躰の問題という見方ただけに特性という視点作りは難しいものだと考えています。

したがって、対応する人が一人で抱え込まないことが重要ですね。とくに問題が微妙であればある

ほど、特性が軽度であればあるほど、先ほど担任の先生から「こういう問題がある」とは言い難いという話がありましたが、担任の先生に代わってどなたかが相談のキッカケ作りの役割を果たせるか、そうした態勢が作れるだろうか考えると、日本の現状は関連するマンパワーがまだまだ乏しく適切な保障や対応態勢作りが困難な事態があるかと思えます。

具体的には、問題を提起する人と提起されたことに親御さんとしては不満や不安を感じるわけですから、別の方が親御さんからじっくり話を聞くことが必要だろうと感じています。それを提案した側、早く対策に繋げたいと思っている方にとっては足を引っ張るような動きになりかねないわけですが、役割としてそういう人がいないと来なくなってしまう、繋がらなくなってしまうということに結果的になりかねないので、「うちの子は大丈夫です」と思っている気持ちにおつき合いでする人が常にいてくれる態勢をできるだけ意識する、複数スタッフでの対応が重要だと考えています。

とくに悩ましいのは、親御さんに特性という視点がない場合、以前はそうした発想がなかったわけで躰の問題とかやる気の問題として誰かが悪者にされたわけです。その人が悪いから、そういう対応が問題だからというような見方をされながらも切り抜けて家族を構成している人もいらっしゃり、だからこそ本人の持っている特性と折り合えない、衝突の繰り返しになりかねない。家族なので感情が出易く、そうした事態が虐待等の一要因になっていくのかなと考えています。

あと、ADHD の多動が目立たないタイプの話もありましたが、知的能力は十分あるのだけれど、やはり言葉の発達が少し遅め、とくに始語は少し遅くなかったかということも大事な情報です。始語は少し遅めだったけれども、その後はすぐ二語文になり順調だった。すると言葉に関してはこの子は大丈夫ですという話になってしましますが、始語はどのくらいの遅さだったのかということもADHD 系の特性を疑う時の情報の一つかなと思っています。これはあまり確立された情報ではありませんが、表出性言語発達の経過を的確に把握していくことも大事なかなと感じています。

石川 畑中さん、話を聞いていただいて感想があればお願いします。

畑中 せっかくの「にじいろファイル」を、まずは町内の先生たちに知ってもらうところから始めようと思っています。支援者に伝えたいことのページもあるので、配慮して欲しいこととか、誰とこういう相談をしたとか、何歳の時にこんなことがあったとか、本当に上手く書いていけば、親御さんが後で振り返る資料になるのかな、上手く活用していければと改めて思いました。

町教委 私は相談者がたらい回しにされないということかな、あの時に話したことをまた話さないといけなくはないのかと思わせないことが一番だと思います。

先ほど、児童相談所を見たという話がありまして、しっかり活用されているんだなと思いました。勿論、ファイルで記録される情報も重要なんですけど、町の場合チームワークよく、日常的に連携されているという実感があります。日頃から顔の見える関係があって情報交換をすごく行っています。

先ほど鈴木先生が、軽度の方への伝え方が難しいと言われましたが、先生は保護者に対して発達の問題があるのではないかと伝えるのがすごく難しいという話をよく聞きます。保護者との関係を大事にしたいと思えば思うほど上手く伝えられないという学校での課題があると思います。最近はスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーが学校に入ってきて担任に代わって伝える役割が大きいのかなと日々感じています。

畑中 玉村町では社会福祉士をコミュニティソーシャルワーカーとして配置して、スクールソーシャルワーカーとの連携も少しずつ始めています。

<ライフステージに応じた切れ目ない支援の実現>

石川 次に切れ目ない支援の実現に向けて、ライフステージの学齢期、青年期、それぞれ子どもたち、若者たちは生きづらさを感じる時があります。その時にちょっと相談してみようと思える、そんな日本を作りたいという願いが皆さんにはあるかと思います。

まだまだたくさん課題があるかと思います。ライフステージに応じた切れ目ない相談支援の作っていくうえで、今ご自身で感じている課題、或いは既に取り組んでいることでも結構です。ご発言ください。

望月 前橋でもやはり縦割りの行政になってしまっているところもありますが、やはり切れ目ないというところで、横に横にというところで、今はいろんなところで協力し合うというか、つなげていくことをしています。

保護者があちこちで同じ話を繰り返すというのは、やはり一番の苦痛になると思うので、保護者の了解を得ながら、ここまでは話をするねと、横に横にとつなげています。

秋松 保護者一人一人認識が違いますので、実際の生活をベースにどういう風に細かい部分を共有していくか課題があります。保護者の方も重度の子どもさんは認識されていますが、軽度となると期待というところもたくさんからんでくるので、理解していただくのが難しいなと思っています。

幼稚園・保育園を訪問して感じるのは、やはり数の多さですね。ークラスに3人、4人と気になるお子さんがいて、先生たちももうアップアップ、てんてこ舞いでいます。どうにかならないでしようかと相談を受けますが、数の問題ですし、どこにつないでいけるか、誰が先生と一緒に子どもさんのことを考えてくれるか、園は勿論、担任をバックアップしていますが、専門家とか、通所機関とかがつながりが持たなくて困っているのがたくさんいるのだなと、最近再認識しています。

そうした人たちの声を拾っていききたいなと思っていますが、連携についてはもう一捻りしていききたいなと思っています。

武井 教育の面で考えると個別の教育支援計画が有効だと思います。これを見ることで、園や療育などの学びの場でどんな支援を受けてきたのかがすぐにわかります。さらに病歴やかかりつけ医についても書いてあるので、相談先がすぐに見つかります。にじいろファイルの中にも同じようなものがきっとあると思います。

吉田 一つは何を伝えていくか、何を次の機関と共有していくかということかなと思います。日頃の相談の中で、今度小学校に上がるんですが、何を担任の先生に伝えたらいいでしょうかといった相談を受けます。ここがポイントだよねと伝えられたらいいなと思いつつ、お母さんとここは絶対伝えたいねといったことや、幼稚園で役立ったこととかを担任に見てもらえるといいよとか、そういうことが伝えられたらいいなと思っています。

もう一つは、最近はやはりインターネットなどで情報が溢れているので、お母さんたちは将来の見通しのなところ、不安になるということを時々聞いています。お子さんはこういう順序で機関に繋がって、今の状態でいくとこういう時期にこういう機関につながっていけるといいよねといった話も時々織り交ぜながら話しています。

児童相談所は18歳までしか関われないので、18歳以降の相談先にどう繋げていくのかという課

題もあるのですが、そうした場合も、直前に伝えるのではなくてやはり早い段階から少しずつ、次はこういう所に相談できたらいいかな、そんな話も日々織り交ぜながら準備していった、その段階で繋げていくのができたらいいなと思いながら関わっています。

岡 上手くいったケースを担当してもらえるといいなと思います。現場にいと学校の先生とか、福祉サービス事業所とか、上手くいかなかった例も多いんですけど、上手くいったケースを担当すると、やはりあれも満たしたいとか、具体的なイメージが沸きやすくなるので、行政の方も学校の先生も、医療の方も、いろんな所と関わることで何か安定したよねといったケースを是非体験していただきたいと思いました。

鈴木 やはり自閉スペクトラム症特性にしても注意欠如多動症特性と関連した多動や不注意、忘れ物が多いにしても、ある意味で人格形成過程の困難さに関与します。旧来的には「人格障害」と診断されるような状態になっていく懸念もあります。特性故の問題行動が非難されたり、否定されたりする中で防衛機制がその人に形成され、そこが人格障害診断にも絡んでいくと考えています。その人の特性と環境、他者、親御さんや学校の先生や仲間も含めた人間関係の中で繰り返し生じる（特性が絡むゆえ）不快体験→不安が続いているわけです。それが蓄積することで、複雑性 PTSD という概念が出てきていますが、被害感や不安が高まることで社会関係が難しくなっていくのだと考えます。

ですから、本来、軽度な特性であっても現実的には重くなっていく、重く見える状態がひきこもりも含めてあります。そこを時間をかけて第三者(例えば心理系の人)と上手く繋がったり、薬も微調整しながら使うことで、当初の困難状態が予期以上に改善していく人もいます。

この子、ここまで話せるのだ、当初はほとんど緘黙状態で、瞼に髪の毛かかっていたりした子が、意外と変化していくのですね。ですから、一対一的な対応をじっくり保障しながら出会った子とつきあう中で、その子が育っていく、集団の中での適応が難しい時には、そこで生じた不安感情を話せる、聞き出してもらえる人がいることを時間を急がずに保障してもらえることが重要だと考えます。

となると、一人の先生が何十人も見るという体制の中で子どもが育つシステムはどうなのだろうなと思います。全体を引っ張る先生が必要ですが、それが集団をいい方向に向けていくことに繋がる面も必要ですが、そこで難しさ、不安や過大な負荷を感じる子にその気持ちをフォローできる人、例えば副担任などがいるような複数体制を意識しないといけないなと考えています。

＜まとめ「当事者を真ん中に、大人がチームになって支え、支え合う」＞

石川 最後にやはり連携って大事だよねという話になりました。本人は勿論ですが、御家族に一人一人に丁寧に関わっていくのも大事なだろう。そんな提言もありました。

御家族は何故、我が子のことを他の人に知られたくないのだろうか、家族の間では特に問題がないのかもしれない。でも、今の時代、何か気になることがあると、「障害」という言葉が出て回ることがあります。障害、特性、よく分からなければ、それはレッテルを貼られるのではないか、何か不利益を受けるのではないか、もしかしたらそんな不安を抱えている御家族もいるのかもしれない。

秋松さんの話の中で、お母さんたちが、日常生活の中で、具体的にこの子にどう向き合ったらいいのかわからないでいる、そんな時があるという話がありました。

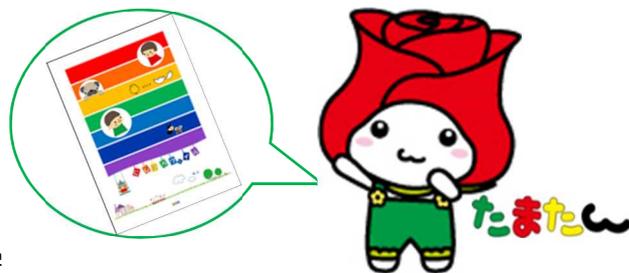
特性があってもなくても、多くの子どもたちが、自分が今難しいなと思っていることを、大人に上手に伝えられません。あの時のこと、どんな風に向き合ったらいいのかということ、身近にいる保

健師や心理士、福祉サービスの先生や学校の先生に教わって、この子はこういう子なんだということが、毎日毎日の生活の中で一緒にいて分かっていたはず。おそらく連携が必要だというのは、具体的にどう向き合ったらいいのかわからないでいる大人がたくさんいるからなんだと思うんです。

だからパパやママが子どもたちとの向き合い方が分かって、安心して豊かに暮らしていけるように、この子のことを分かってもらって、この子が安心して生きていけるその為の連携だ、その為に子どもを真ん中にして、大人たちがチームになって支え、支え合っていくといいよね、そんな風に思っていたら、また違った世界が見えてくるなあという風に、今日の話聞いて感じました。

連携という言葉を使うと、支援者側からの、どう連携するかという話についつい思いを描きがちです。でも、抜かしていけないのは、連携の中に本人と御家族がチームにいるということです。そのことを最後に皆さんと共有して終わりにしたいと思います。

玉村町の取り組み 玉村町役場健康福祉課



教育委員会と町部局の連携

○ 町として、子どもたちの支援に取り組むことは、就学の前からも、義務教育が終了してからも続きます。

なんらかの「生きづらさ」がある場合は特に、継続的な支援・伴走型の支援が求められています。

役場の福祉部局が大人のひきこもり問題なども相談を受ける中で、学齢期からのフォローがもっとできないか、庁内の関係者と協議を行いました。

近年は、ヤングケアラー対応の件でも、教育委員会部局（学校教育課、ふれあい教室）と福祉部局（子ども育成課、健康福祉課、保健センター）のつながりは良好であったので、もう一歩！のツールとして、既存の【玉村町にじいろファイル】の活用を見直し、切れ目ない支援の活性化にチャレンジすることになりました。

「にじいろファイル」を使ってみよう♪

○ 平成21年度に策定したこのA4サイズのファイル（紙ベース）は、お子さんの成長の様子や、さまざまな機関で受けた支援の内容などを一冊にまとめていき、お子さんに関わる人たちが連携し、継続して支援をしていくための物です。

・様式は、町HPからダウンロードできます

⇒ <https://www.town.tamamura.lg.jp/docs/2015021300068/>

・にじいろファイルは、保護者かご本人が保管します。原則、保護者の方やご本人に記入してもらいます。支援者と一緒に書くこともできます。ご本人の状況に応じて、伝えたいと思う箇所に記入してみてください。

・お子さんの成長のステージごとに、ご家族の思いを学校や支援者に伝えたり、サポートを受ける時の情報提供ツールとして役立ててください。お子さんの成長や子育てに不安のある保護者の方も、ぜひ使ってみてください。

・進学相談や就職相談の時などに、その都度、最初から今までの様子を話すのではなく、このファイルに関係者に見ていただきましょう。

「にじいろファイル」の活用

成長の様子やさまざまな機関（教育・医療・保健・福祉等）での相談や支援の内容を一冊にまとめ、情報共有や継続した支援につなげる



いろいろな人とつながって、成長過程で一貫したサポート

玉村町の相談支援ファイル

「にじいろファイル」

がはじまります

ご本人やご家族をみんなで支えるファイルです

◆ 主として発達が気になる、日常生活に困りごとや悩みを抱えるご本人やその保護者の方にお勧めします。

◆ ご本人やご家族の思いを支援者に伝えたり、サポートを受けたりするときに役立ちます。



◆ ご本人やご家族、その支援者（サポートする人）が一緒につくるオリジナルファイルで、何歳からでも使えます。

◆ お子さんの成長や子育てなどに不安のある保護者の方にも、お使いいただけます。

「にじいろファイル」を使って
みんながかかわり、みんながつながりましょう

活用してみたい方は、現在通学、通園している町内の学校園の特別支援教育コーディネーター、保育所の保健師、保健センター、玉村町通級教室、玉村町障がい者（児）基幹相談支援センターに相談してください。

【相談支援ファイル「にじいろファイル」についてのお問い合わせ先】

玉村町保健センター 相談ファイル担当係 TEL. 0270-64-7706

玉村町教育委員会 学校教育課 相談ファイル担当係 TEL. 0270-64-7713

子どもに関わる大人が、特性に応じて一貫した指導・支援を行うことは、子どもの持てる力を最大限に高めると言われています。お子さんが安心して次のステップに進めるように、にじいろファイルを活用して、支援者に伝えてみませんか。

将来、お子さんがファイルを見返し、自分の特徴などを知ることできます。町は、にじいろファイルという存在を広く知ってもらうため、学校や関係者にも、継続的に周知していきます。

活用のご相談：玉村町役場学校教育課または玉村町保健センター まで